

Title	戴季陶による「大アジア主義」の継承と展開
Sub Title	
Author	嵯峨, 隆(Saga, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 地域研究：慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.101- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA8845501X-00000010-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戴季陶による「大アジア主義」の継承と
展開

嵯
峨
隆

はじめに

- 一 「大アジア主義」講演前後における戴季陶の言説
 - 二 戴季陶主義の形成と「大アジア主義」解釈
 - 三 「民族国際」とその外交戦略
- おわりに

はじめに

孫文の晩年の言説を代表するものの一つに、一九二四年一月二八日における神戸での「大アジア主義」講演がある。今日では、近代の日中關係史を論じる際には必ずといってよいほど言及されるこの講演も、当時においては必ずしも大きな反響を呼んだ訳ではなかった。日本のマスコミの中には、孫文の講演に好意的な評価を寄せるものもあつたが、それはごく一部を除いて、当時の日本の論壇で喧伝されていた日本型アジア主義¹に引き寄せて捉えるものが主であつて、孫文の意図に沿つたものとは言えなかつた。また、管見の限りでは、中国でも孫文の講演が大々的に取り上げられた形跡はない。例えば、講演翌日の『民国日報』は「電訊」欄で孫文の講演が聴衆に感動を与えたことを、僅か百字ほどで伝えたのみであつた。また、中国共産党の機関誌は、孫文の演説が「中国の民衆と日本の労働者・農民に対して、非常に大きな弊害をもたらすもの」と批判的なコメントを残していたのである。²

孫文の「大アジア主義」講演が政治的言説として注目を浴びるようになるのは、一九三〇年代の日中關係の悪化の過程においてである。即ち、和平救国運動を進める汪精衛は、親日政権を樹立するに当つて、三民主義の反共・親日的解釈を行なうとともに、神戸での講演をも新政権樹立の根拠の一つとした。³これに対して、胡漢民は「抗日を主張するのは正しく大アジア主義を身を以て実行するに外ならず、同時に孫先生の意思を継承するものである」と正反対の解釈をしていた。このように、三〇年代の中国では孫文の講演の理解については、全く相容れない二つの見方が存在したのである。

それでは、「大アジア主義」講演についての解釈は、日中戦争に至るまで全くの空白状態であつたのかといえ、決してそのようなことはなかつた。何よりも、孫文の通訳として講演に立ち会つた戴季陶がその最初の解釈者で

あったのである。そこで、本稿は一九二〇年代後半という国民革命の時代における孫文の大アジア主義理解の一つの、しかし重要な解釈の一形態としてそれを検討しておかなければならないと考えるのである。

戴季陶（一八九一―一九四九）は清末に日本に留学し、帰国後はジャーナリストとして活躍し、その後は孫文の秘書となり、孫文死後は国民党右派の理論家・政治家として活躍した。戴季陶の前半生の政治生活は孫文と共にあり、彼が孫文から受けた影響は多大なものがあつた。しかし、彼は孫文亡き後の国民党における蒋介石の支配体制を理論的に支えた人物でもある。そのような人物の大アジア主義解釈は、恐らく一九三〇年代における解釈と接点を持つことはないだろう。それは多分に、国民革命時期における時代的課題を反映したものと考えられるのである。以下、本論では、神戸での講演の前後における戴季陶の言説から説き起こし、「大アジア主義」講演についての彼の解釈の分析を行ない、外交戦略に応用された「民族国際」について考察を進めて行くことにする。

一 「大アジア主義」講演前後における戴季陶の言説

国民革命時期の戴季陶は、孫文の秘書であつたにも拘らず、国民党中央執行委員などの役職への就任を拒むなど、国共合作の推進に対しては消極的な姿勢を示していた。彼は孫文の呼び掛けに応じて、一九二四年一月に広州で一大大会に出席したものの、その後党内の派閥争いに卷込まれたことに嫌悪感を覚えて上海に移つた。

この時期の戴季陶の国際政治観を示すものに、上海大学での講演をまとめた「東方問題と世界問題」がある。この講演は、近三、四〇年間における帝国主義列強の動向について論じたものである。このことを主題とする理由は、列強の角逐の結果として、中国などの東方諸国がようやく半植民地としての状態を保ち得ているという事

実があるからである。彼はここでイギリスとロシアの外交政策を取り上げ、前者が海洋主義、孤立主義、平和主義の三つを柱とするものであったこと、そして後者は汎スラブ主義と不凍港獲得を主眼とするものであったことを指摘している。また日本については、日露戦争後のアジアにおける盟主の地位は、イギリスの保護の下で得られたものであって、「栄光ある大日本帝国主義は大英帝国主義の出張所」に過ぎないと評し、その対英追隨外交を批判していた。

戴季陶が見るところでは、ヨーロッパの国際政治体系はイギリスを中心とする大惑星系の如きものである。だが、そこには秩序変容の可能性も存在している。そのことを示しているのがロシアとトルコの革命である。即ち、前者はロシア国民の革命であると同時に、被抑圧民族を連合させて帝国主義に反抗させる可能性を持つものであり、また後者はイスラム教徒を抱えるアジア・アフリカ諸国での変革運動に大きな影響を与える可能性があると考えられたのである。しかしこの段階の彼の考えでは、被抑圧民族の連帯による帝国主義との対決という国際戦略が具体像として描かれるには至っていなかった。

さて、孫文存命中の戴季陶の思想傾向は、孫文の動向との関連を無視して論ずることはできない。その孫文は、一九二四年一〇月に発生した北京での政変を受け、十一月一〇日に「北上宣言」を発して一三日には広州を發ち一七日には上海に着いた。孫文はここで予定を変更して日本訪問を決意することとなり、二三日には長崎に、そして二四日には神戸に到着した。この度の孫文の訪日は、従来からの持論である日中ソ三国の提携を内実とする「吾人之大亜細亞主義」への、日本政府からの理解と支持を求めてのものであった。

一月二八日に神戸女学校で行われた孫文の「大アジア主義」講演の要旨は以下のとおりである。①三〇年前の日本の列強との不平等条約廃棄は全アジア民族の復興の起点である、②日本のロシアへの戦勝は、近数百年においてアジア民族がヨーロッパ民族に勝利した最初のものであり、ここにアジア民族は各々独立運動を起すこ

ととなった、③大アジア主義は文化問題であり、我々の大アジア主義を建設するには固有の文化的基礎が必要であり、それは王道文化を用いて西洋の覇道文化に対抗することである、④大アジア主義を講じることは、アジアの苦痛を受けている民族のために、如何にしたらヨーロッパの強力な民族に抵抗することができるかということである。

帝国主義列強に対抗するためにどのような方策があるかと言えば、それは被抑圧民族・国家の連帯による以外にはない。しかし、孫文は全ての被抑圧民族を一律に連携対象と考えていた訳ではなく、先ずは被抑圧民族を平等に遇する強国の力を借りながら中国の独立を達成しようとするものであり、あくまでも自国の利益を最優先させるものであった。⁽⁹⁾ そのような考えから、提携対象として浮かび上がってくるのがソ連であった。孫文は神戸での講演において、「ロシアは仁義、道徳をとまえ、功利と強権をとまえようとはしていません。ロシアは公正な道をあくまで主張し、少数が多数を圧迫することに賛成しないのであります」と述べ、ソ連を提携対象の一つに想定していたのである。それでは、この時点での孫文は日本をどのように見ていたのであるうか。後に作り上げられるイメージとは異なって、「大アジア主義」講演での孫文の言説は必ずしも対日批判を意図したものでなかった。また、帰国後のインタビュアーにおいて孫文が、「日本は速やかに亜細亞に帰らねばならぬ。而して第一着手に先ず露国を承認すべきと思ふ」と述べていることは、彼の以前の主張である日中ソ三国提携論が持続していたことが理解されるのである。

それでは、この時孫文に同行していた戴季陶はどのような姿勢を見せていたのであるうか。彼は上海から長崎に渡る船中で、日本の新聞記者のインタビュアーに答えて、孫文が日本国民を中国の「唯一の友」と考えていると述べた上で、彼自身もまた「日中両国はこれまで」多少の行き違ひもあつたやうですが、これからすべて過去を葬り新たなところで行きたいと思ふ⁽¹²⁾と、日中提携の必要性を述べていた。当然のこととはいえ、秘書という立

場にある以上、戴季陶は対日政策に関しては孫文と異なる意見を述べることはなかったのである。

然るに、孫文の神戸での「大アジア主義」講演を前後として、戴季陶の孫文思想解釈は特異なものとなって行く。そのことは、日本の新聞に掲載された二つの記事から窺うことができる。第一に挙げられるものは、日本滞在中に新聞社のインタビューに答えた「孫文氏と其事業」である。ここで戴季陶は、孫文の革命事業が単に内政を改良することを目的とするだけでなく、「如何にして支那の民族的再生を図り、また如何にして東洋諸民族の独立を図るか¹⁴⁾」を主たる動機とするものであったとし、三民主義が本来的にアジア主義的内容を持っていたと解釈する。そして、その民族主義は「全人類の平等を求めるといふこと」であり、「故に一民族を以て一民族を排斥するといふ意味でなく一民族を以て他の民族と結合する¹⁵⁾」という国際的連帯を求めると述べていた。また、民生主義については中国の伝統思想との関連で論じられているが、この点に関しては今一つの記事である「支那を救ふは国家主義」の中でより鮮明に述べられている。

戴季陶はここで次のように指摘する。即ち、孫文が神戸での講演で「王道と霸道」について論じたことは、「三民主義」講演の民族主義の最後の部分で中国固有の道徳を強調したこととの延長線上にある。その「固有の道徳」の中でも、国家主義を説く孔子の教えは今日最も重視されなければならないものである。そして、孫文こそが孔子の再来であつて、孫文思想を宣揚することは儒教の復権を意味すると言うのである¹⁵⁾。また、この論説では孫文の知行説についての伝統主義的な解釈がなされているが、こうした見方は翌年に執筆される『孫文主義の哲学的基礎』に引き継がれるものである。

この時期の著作のうち、孫文の「大アジア主義」講演と密接な関係を持つのが一九二五年三月に発表された「日本の東洋政策に就いて」と題する論説である。戴季陶はここで、アジア（黄色人種）対英米帝国主義（白色人種）という図式で国際政治を見ているのであるが、近年に至って日本以外のアジアの人々は列強の跋扈に対して怒り

を見せなくなったと指摘する。彼はこれを「東洋諸国民の自滅的心理」と称するのであるが、こうした傾向は全て日露戦争後の日本の対アジア政策に起因するものである。即ち、当時は日清戦争での敗北から日が浅かったにも拘らず、中国の民衆は日本に対して敵意を抱いておらず、むしろ好意的であったと言える。それは、彼らが列強のアジア侵略に対抗するために、日本の維新を頼りにしようとしたためである。それ故、中国は日露戦争での日本の勝利を祈り、戦勝後は満洲におけるロシアの利権の継承を認めこそすれ、それを怨みに思うことはなかったと言っているのである。⁽¹⁶⁾

簡単に言えば、日本にはアジアのリーダーとしての各民族の独立運動を援助することが期待されていたのである。然るに、日韓併合以後の対アジア政策全般の誤りによって、「東方諸国民は既に日本に愛想が尽きて居る」状態となった。今や、「日本は帝国主義を抛棄して東方諸国民の友となるを明白に表明しなければ、東方諸国民の日本に対する信頼心が生じて来ない」のである。⁽¹⁷⁾だが、日本には希望が全くない訳ではない。そのことを説明するに当って、戴季陶は『孟子』の梁恵王章句上に見える「惟、仁者のみ能く大を以って小に事うるを為す。惟、智者のみ能く小を以って大に事うるを為す。大を以って小に事うる者は、天を樂しむ者なり。小を以って大に事うる者は、天を畏るる者なり。天を樂しむ者は天下を保んじ、天を畏るる者は其の国を保んず」という一説を引き合いに出す。

これが意味するところは以下のようなものである。即ち、仮に大国であっても、隣りの小国を侮らずに礼を厚くして交際することが肝心であり、それは仁者だけが行ない得るものである。他方、小国であるなら如何に圧迫されても、よく堪えて大国に仕えて安全を図ることが必要なことであり、それは智者だけが行ない得るものである。戴季陶は、以上の言葉を以って国際政治の本質と見なしている。即ち、日本が今日の大国の地位に至ったのは、日英同盟の力に負うところが多く、これは「小を以って大に事う」を实践したことによるものであった。し

かし、その後の日本は「大を以って小に事う」ことをせず、ひたすら近隣諸国を蹂躪し続けたため孤立するに至ったとし、今後の日本は「仁者」の政策に転換すべきであると言うのである。

そして、戴季陶は具体的に以下の三点を提起した。第一に、対中国政策に関して国民の独立運動を援助し、治外法権の撤廃と関税独立を列国に勧告すると同時に、列国に率先してその範を示し「二十一カ条条約」の放棄を宣言する。第二に、日本国内の問題に関しては今までの植民地統治方式を放棄し、朝鮮、台湾の民族的自由を尊重し、人民議会の召集と自治政府の樹立を許し、各民族の自由な連合によって統一国家の基礎を固める。第三に、ソ連と速やかに国交を回復し、ドイツに対しては経済活動の自由を与え、国家復興の機会を与える。これによって、日本・ドイツ・ソ連の親善の気運を促進し、日本の国際的孤立状態を脱する、というものであった。このようにして初めて、「東方諸国民の大同團結は日本を中心として出来る」とされるのである。¹⁸⁾

以上の三項目は、孫文の「吾人之大亜細亞主義」にほぼ沿ったものであることが理解される。しかし、日本に対する期待の度合は孫文とかなりの開きがあるように見える。例えば、日本に对外政策の変更を求める中で、戴季陶は孫文の「大アジア主義」講演に言及しているが、彼の述べるところでは、孫文は神戸で東洋の王道文化の復興を鼓吹したため、一部の世論にはこれを日本人の好みに応えようとしたものと見る向きがあるがそれは間違いである。孫文はそのようなことを意図したのではなく、むしろ「全く近代の国家的民族的道德の衰沈を憂ひ近代の政治哲学の余りに進歩せざるを慨し、東洋古代の政治哲学特に孔孟の政治哲学の真義を高唱したのである」¹⁹⁾。こうした解釈は、先の「支那を救ふは国家主義」における観点と基本的に同一である。然るに、戴季陶は日本「政府」だけでなく「民族」自体に道德の回復を求めていることは特徴的である。例えば、関東大震災において「興奮した群集が弁別力を失ひ無意識的に行った」事件は、日本民族が仁義道德を欠いていることを証明していると思なされたのである。²⁰⁾このように、他民族と同一の地平に立とうとしない日本が、ベルサイユ講和会議の場で人

種差別撤廃要求を提出したことは自家撞着も甚だしいものと考えられた。戴季陶のこうした見方は、日本の論壇におけるアジア主義の熱狂が、孫文の考える「吾人之大亜細亜主義」と相容れないものであることを踏まえてのものであったと言えよう。

以上のように、「大アジア主義」講演前後の戴季陶は、孫文思想に対する独自の思想解釈の端緒を見せつつも、基本的には「日中ソ」の提携という孫文の方針を離れることはなかった。ただ、日本に対する不信任感は強くなっていたことが窺えた。それでは、孫文死後の状況では戴季陶の言説は如何なるものとなっていたのであろうか。そのことを次章で見て行くことにする。

二 戴季陶主義の形成と「大アジア主義」解釈

一九二五年三月二日、北京滞在中の孫文が病氣のために死去した。これによって、国民党を束ねる権威は不在となった。この後、戴季陶は国民党内における孫文思想の絶対化に取り掛かることになる。それは、党内で生じつつあった矛盾ないし葛藤を、孫文個人の統合力に代わり得る根拠を確保することによって調停できると考えたためであると言われている。⁽²¹⁾そして、彼の言葉によれば、「我々の唯一の責任は、総理の遺囑を完全に接受すること」であり、「我が党は全体が一致して総理の遺教をその通りに実行し、新たに改作することは許されない」⁽²²⁾のである。

戴季陶は以前から、国民党においては一つの主義に忠誠を尽さなければならぬという考えを持っていた。それがこの時期に至って、更に強調された形を取って現れたということが出来る。この後、彼は『孫文主義の哲学の基礎』（一九二五年六月）と『国民革命と中国国民党』（同年七月）を発表した。前者は三民主義を伝統主義的に

解釈したものであり、後者は国民党員の質的向上と志気の高揚を訴えると共に、中共の国民党内での寄生政策を批判したものであり、いずれも反共主義を前面に押し出したものであった。そのため、中共とコミンテルンからは強い反発がなされ、これ以後その主張は「戴季陶主義」の名を以って批判されることになる。言うまでもなく、その名称は国共合作を推進した孫文の思想との異質性を際立たせることを意図して附与されたものである。⁽²³⁾

さて、戴季陶主義の根幹をなすと見なされるのは『孫文主義の哲学的基礎』である。以下、その内容と特徴を簡単に見て行くことにしよう。

戴季陶は該書において、孫文の三民主義を伝統主義的に解釈するのであるが、そのことが最も典型的に現れているのは、智仁勇を論じた「軍人の精神教育について」（一九二二年二月）に言及した箇所においてである。戴季陶はこの講話を「国民革命を成就しようとするための基本教科書であり、先生の倫理思想の最高理論である」と位置づける。そして、そこから導き出される孫文の思想的全体は以下のように要約できると述べている。⁽²⁴⁾

天下の達道は三、民族なり、民権なり、民生なり。之を行なう所以の者は三、智なり、勇なり、仁なり。智勇仁の三は天下の達徳なり。之を行なう所以の者は一なり。一とは何ぞ、誠なり。誠なるものは善を択って固執するものなり。⁽²⁵⁾

そして戴季陶は、以上のような理論体系の中に、更に一つの要点を見出すことができると言う。それは「能作」と「所作」であり、能作の部分は孫文の道徳に関する主張であり、所作の部分は政治的主張である。即ち、前者は古代中国の正統倫理思想を継承し、後者は現代政治の経済組織、国家組織、国際関係及び種々の制度の認識によって作られた新たな理論であるという。そして、「三達徳」（智仁勇）を「能作」、「三達道」（民族、民権、民生）を「所作」とし、「誠」を民族精神の原動力とした。⁽²⁶⁾ 孫文の特徴は、「何時如何なる場合にあつても、力を尽し中

国固有の道德的文化的意義を鼓吹し、中国固有の道德的文化的価値を賛美したこと⁽²⁷⁾であるとされる。このような伝統的価値の存在こそが、民族の自信を生み出し、現実の革命としての所作の前提となるものであった⁽²⁸⁾。

さて、孫文の「軍人の精神教育について」を一読すれば、確かにそこには智仁勇の概念がちりばめられている。しかしそれは、あくまでも軍人の責任意識の高揚を目指したものであって、決してそれ以上のものではなかったと考えられる。然るに、戴季陶はこれを『中庸』の「五達道」「三達徳」に準えて解釈するのである。『中庸』では君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友の交わりが「五達道」とされているのであるが、彼にあっては三民主義がそのまま「三達道」として普遍的真理とされるに至ったのである。このような発想は、前年に発表された「支那を救ふは国家主義」の延長線上にあり、それが思想的に体系化されたと見るべきであろう。

それでは、中国革命の特徴は如何なるものであるのか。戴季陶は『孫文主義の哲学的基礎』の中盤で、孫文の革命理論を論ずる中でその問題に言及する。彼はここで、中国社会には明白な対立は存在しないため、階級的利害に基づいた革命方式を採用することはできないとする。また、階級対立の出現を待って、初めて革命を起こすことも不可能である。むしろ、中国における革命と反革命の対立は、覚醒した者とそうでない者との対立であって、階級間のそれではない。それ故、今日の中国で必要とされることは国民全体の覚醒を促すことであって、一つの階級を促すことではない。孫文が唱えた「知難行易」説の革命運動における意義はここにあるとされたのである⁽²⁹⁾。

戴季陶によれば、革命は利他心から生じるものであって、利己心から生じるものではない。それ故、仁愛は革命道德の基礎であり、革命家の知的努力は完全に仁を知るためのものである。そして、中国では階級が未分化であるため、革命達成のためには、被支配者層の人々が自覚して自らの利益を求めらるることに加え、支配者層を覚醒して被支配者層の利益を図ることが必要であると考えられた⁽³⁰⁾。こうした立場は、階級調和論以外の何物でもなか

った。かかる傾向が、当時高揚しつつあった中共指導下の労働運動に触発されてのものであったことは、容易に理解できるところである。

戴季陶が調和主義に加えて、儒家思想の中で強調するものに国民の政治的徳徳がある。彼は『孫文主義の哲學的基礎』の中で、『大学』と『中庸』を総合すると「人一家一國」の三重の連帯責任構造が抽出されると指摘する。そして戴季陶は、これが孔子の思想の主要部分であり、孫文の思想の中心をなすとしたのである。もちろん、儒教經典に記される「國」や「世界」が今日のそれと同一に論じられないものであることは明らかである。それにも拘らず、戴季陶はこれらを以って今日そして将来の徳徳としなければならぬと説くのである。ここには、伝統的価値体系を媒介として国民を國家の成員化として行こうという試みが見てとれるであろう。ともあれ、戴季陶の見るところでは、孫文は以上の如く中國の文化的伝統の眞の継承者である。それ故、今や國民革命の達成のためには、孫文の思想を基礎に据えなければならないのである。

さて、戴季陶主義が「主義」と称せられる所以は、孫文の著作全体を儒教徳徳という一つの価値基準によって統一的に解釈したことにある。それでは、孫文の外交思想に関わる言説はどのような評価と解釈がなされたかが問題となる。言うまでもなく、その中心として取り上げられるのは「大アジア主義」講演である。

戴季陶によれば、「大アジア主義」講演は「最も良く先生の中心思想を明白に表現しているもの」とされる。しかし、孫文は一般の「大アジア主義者」ではなく、「世界大同、人類の進化」を最終目的とする愛國主義者である。そして、その主張である被抑圧民族の連合は、理論的にはアジア大陸に限られるものではなく、世界の弱小民族を包含するものであったのである。戴季陶は、孫文の主張が単なる地域連合を目指したものではなかったと解釈している。ただ、世界の被抑圧民族がアジアに集中していることから、アジアの連帯がその中心を形成することになったと言うのである。

以上のような被抑圧民族の連帯の主張を、戴季陶は大アジア主義の「事実面」と見なす。というのは、孫文の講演はもう一つの側面である「思想面」において、より重要な意味を持つと考えられるからである。即ち、戴季陶の理解するところでは、孫文は中国古代の倫理哲学と政治哲学を世界文明史上における最も価値を持つ精神文明の結晶と見なし、全ての人類の真の解放のためには、中国固有の仁愛思想を道德の基礎としなければならぬと考えていた。あらゆる科学文化は、仁愛の道德の基礎の上に作られ、然る後に世界人類は初めて真の平和を獲得するのであって、同時に文明の進化も真の意義を有するようになるのである。⁽³²⁾かくして、中国固有の道德は、独り中国という空間において意味を持つだけでなく、世界が大同に向かうための基礎と見なされた。即ち、この道德文化は人類同胞精神の産物であるが故に、これを回復させることによって先ず国を救い、そして更にはこれを全世界の統一のための基礎とすることによって、全人類における中国人の使命は完了すると考えられているのである。

戴季陶は次のように述べる。「この中国を愛するという心を広げていけば、それが即ち全てのアジアの抑圧された民族を愛することになり、極点まで押し広げて行けば、全ての人類を愛するということになるのである」⁽³³⁾。確かに、前述したように、孫文は神戸での講演において、「大アジア主義」が結局は文化の問題であり、東洋文化と西洋文化との比較および衝突の問題にはかならないと述べ、仁義、道德という道德的価値観を以って西洋列強に抵抗しようと考えていた。それは、言わば対抗的価値として捉えられていたのである。然るに、戴季陶においては、中国の伝統文化は普遍的な価値にまで高められていると見る事ができるであろう。

戴季陶の解釈するところでは、孫文の「大アジア主義」講演は「欧州文化の基本思想に対する宣戦布告」であった。そして、西洋文化に対する孫文の批判は二つの面に亘るものであると考えられた。即ち、一面では軍国主義と資本主義とに反対し、そしてそれらを基盤として発達して来た帝国主義と個人主義に反対したことであり、

もう一面ではヨーロッパの物質中心の歴史観から階級闘争を絶対的な手段とする社会革命思想に対しては、人類の生存という観点からその誤りを正し、社会革命に民生哲学の倫理性を附与したのである。³⁴我々はこのような主張の中に、中国の文化的伝統の強調と同時に階級調和論という戴季陶主義の構成要素を見出すことができる。まさに、戴季陶の大アジア主義解釈は国民革命の進展の中で国民党の在り方、思想的在り方ということとの関連で捉えられていたのである。そして、「事実」と「思想」を統一する中心を「先生自身の一つの誠を以つて智仁勇の三徳を貫く全人格」³⁵であつたとするように、戴季陶の大アジア主義解釈は孫文の思想と人格を神秘化するものでもあつたと言ふことができるであらう。

それでは、この著作の中で戴季陶は日本に対してどのような評価を見せていたのであろうか。それは数カ月前に書かれた「日本の東洋政策に就いて」と殆ど変わるところはない。ただ、その批判の表現がかなり具体的になつている点は注目に値する。即ち彼は、アジアの民が抑圧に苦しんでいる中、「極めて小なる日本だけは東方に在つて強盛になるや、これによつて東方民族も大いに刺激されることとなつた」と、近代以降の日本が果たした歴史的役割を高く評価しつつも、次のように批判を加えている。

しかし惜しむらくは、日本は東方民族の道徳を捨て去り、完全にヨーロッパ帝国主義に学んだ。日本が強大になつてからは、第一に琉球を滅ぼし、第二に朝鮮を滅ぼした。東方民族の団結は反つてこのために阻害されたのである。³⁶

この言葉は、孫文であれば決して口にすることはなかつたであろうし、戴季陶でさえも孫文存命中であればこうしたことを言うことはなかつたと考えられる。彼はさらに、日本は強大になつてからも、大を以つて小に仕えるという東方の民族道徳や国家道徳を継承していたなら、アジアの状況は勿論のこと世界の国際関係も異なつてい

たであろうと述べている。ここには、孫文時代には抑制されていた日本批判が公然化しているということと同時に、日本の侵略的傾向を道徳基準で論じようとする傾向にある点で特徴的である。このことは、伝統思想を以って孫文思想を解釈するという、『孫文主義の哲学的基礎』のモチーフが貫徹された結果であると言いうことができる。

以上で見て来たように、戴季陶は孫文死後の国民党内で思想的一元化を図るべく、孫文思想を伝統主義的に解釈しそれを絶対的な地位に高めようとした。それは、孫文存命中の「支那を救ふは国家主義」の内容を伏線とするものであり、神戸での「大アジア主義」講演も同様の基準で解釈されたのである。然らば、孫文が神戸で強調した「日中ソ」三国提携の戦略は、戴季陶の中にあつてはどのように受け継がれたのか。日本に対する評価の厳しさは、国際戦略面にまで及ぶものであつたのだろうか。次節では、この点を含めて戴季陶の対外認識について検討して行くことにする。

三 「民族国際」とその外交戦略

前節では孫文の「大アジア主義」講演についての理論的解釈を見て来た。孫文死後の戴季陶で今一つ注目すべきことは、孫文の被抑圧民族解放の思想を現実の運動へと高めようとしたことである。それは、孫文の「アジア主義」と称される外交構想を、更に発展させたものと見ることがができる。

一九二五年時点における戴季陶の対外観は、イギリス主敵論に基づくものであつたと言いうことができる。前節で述べたように、戴季陶はこの年の三月に発表された「日本の東洋政策に就いて」において、日本・ドイツ・ソ連との提携を唱えていた。彼の見るところでは、これまでの日本は日英同盟によってアジアの盟主の座に就いたものの、それは結局のところイギリスの極東での「出張所」でしかなかった。「過去の日本は海洋国と同盟して

大陸に於ける優越なる地位を獲得したと反対に将来の日本は大陸国と同盟して始めて海洋に於ける安全と発展が得られる⁽³⁷⁾と考えられたのである。これは「大陸同盟」説と言われるものであり、ベルサイユ体制およびワシントン体制から疎外された国々を結集しようとしたものと見ることが出来る。これは孫文以来の外交戦略である。しかし、これがそのままアジア主義に結びつくものではない。何故なら、そこには被抑圧民族の抵抗という要素が欠落しているからである。

戴季陶の言説において、被抑圧民族の帝国主義に対する抵抗運動が外交戦略論として現れてくるのは一九二五年四月から六月にかけてのことである。彼はこの間、三民主義の意義についての二つの講演を行なっているが、そこに示された対外認識は以下のようなものであった。戴季陶は先ず、帝国主義の持つ国際性と、それに反抗するための諸民族の連帯の必要性を表明している。即ち、中国は世界に向かつて独立と平等を求めなければならぬのだが、「それは一民族が単独で解決することができないものではない。我々は現在、全世界の帝国主義国家の我々に対する抑圧が、ある一国だけが行なっているのではなく、そうした圧迫が既に国際性を含んでいることを知っているのである」⁽³⁸⁾。帝国主義国家が既に国際的に相互連携性を持つている以上、被抑圧民族もまた反抗のために国際的連帯を図る必要があるのである。続いて彼は次のように述べる。「帝国主義の国際性は顕著である。経済・文化的な落伍者である中国に対する彼らの侵略は、それぞれが個別に行なっているのではなく、彼らは一つに結合し共同して侵略し、中国人民を搾取しているのである。〔中略〕被抑圧民族の問題と帝国主義国家の被抑圧民衆の問題を解決するには、皆が連合して共同して奮闘することが必要である」⁽³⁹⁾。ここに、中国革命が全世界的な反帝国主義運動の中に位置づけられたことが見てとれるのである。

続く講演で、戴季陶は帝国主義国家の中でアジアにおいて最も悪質な存在はイギリスであるとし、これに抵抗すべくアジアの被抑圧民族の連帯が必要であると論じた。アジアにおけるイギリスの本拠地はインドである。そ

のため、帝国主義の打倒のためにはインドの革命運動との連携が必要となる。また、チベットはインドと中国の間にあって、両国を陸路で結びつける重要な場所である。そのため、チベット民族を目覚めさせて革命運動に参加させ、彼らにその運動が民族の自由と平等を求めるものであることを知らしめなければならないのである。即ち、チベットの革命運動は中国革命とインド革命を繋ぐ鎖の役割を果たすものと考えられているのである。⁽⁴⁰⁾なお、戴季陶はこの講演で、三民主義が主張する救国は「武力」を基礎とするものではなく、「民族」を基礎とするものであり、その民族とは「文化」を基礎とするものであると述べているが、このことは前述した孫文の「大アジア主義」の「思想面」に通じるものと言えるであろう。

戴季陶がイギリスを主要敵と見なす傾向は、一九二五年の五・三〇事件への対応にも現れている。即ち、彼はこの当時上海に在って、総商會會長である虞洽卿らと日系紡績工場の争議の調停に当たるとともに、イギリスに対する行動に全力を傾けるよう主張していたのである。また彼は、この年に広州で起きた「沙基事件」に際して次のように述べていた。「東方ではイギリスが唯一の強国であり、全東方民族の九〇パーセントはイギリス帝国の圧政下にある。それ故、我々の反帝行動は第一目標がイギリスにあることを認識しなければならない」⁽⁴¹⁾。そして日本に対しては、政府には断固たる態度で臨むが、国民に対しては「東方に戻れ」と呼びかけることを表明している。⁽⁴²⁾先に見た、『孫文主義の哲學的基礎』における日本批判にも拘らず、戴季陶が現実の外交戦略を論じる場合には、それは前面に押し出されることはなかったのである。

しかし、このようにイギリス帝国主義に対する強い批判の姿勢にも拘らず、戴季陶は大衆運動の高揚には慎重な姿勢を以って臨む。彼は中国の独立問題が、大衆による短期間の罷市や罷業によって解決できる問題ではないと考えていた。それは、国際社会における国家戦略によって実現されるものであったのである。そこで提起されたのが民族主義と国際主義を結合させた「民族国際」という機関の創設であった。

戴季陶によって民族国際の構想が明らかにされたのは、一九二五年七月三〇日の新聞記者とのインタビューにおいてであった。ここで彼は、現在の世界で最大の罪悪行為をしているのは国際連盟であるとし、それは帝国主義国家が世界を共同して侵略するための総司令部であると論じている。確かに、イギリスは東方の最大の霸王であるが、何か問題が生じた場合には、必ずや国際連盟の勢力を合わせてその処理に当るに違いない。それ故、中国としてはイギリスへの抵抗は国是としながらも、国民に対しては帝国主義の国際組織である国際連盟という怪物の存在を認識させ、帝国主義によって抑圧されている弱小民族の連帯組織を創設する必要があるのである。

その被抑圧民族による連帯機関こそ「民族国際」であるが、これは孫文の遺志を受け継いだものである。そして、その中心となるべき国家は中国、ソ連、ドイツ、オーストリア、トルコの五カ国であり、構成国としてはエジプト、ペルシャ、インド、アフガニスタン、バルーチスタン、ベトナム、朝鮮、フィリピン、南アフリカ諸国が想定されていた。また、それは組織として常設機関を設け、抑圧者に抵抗するほか、各国の国民経済、文化交流、国際法、移民等の重要な問題を計画し、文化・経済面で立ち遅れた国民の進歩と発展を図るというものであった。⁴⁴⁾

ここで問題となるのは、以上のような民族国際の構想の中で、日本がどのように位置づけられていたかということである。もちろん、日本はその構成国にも含まれていないのであるが、戴季陶が次のように述べている点には興味深いものがある。「日本がいったいどちらの方向に向かうかは、極めて注目に値する問題である。恐らく、それは中国に対して不平等条約を取消し、東方に戻ってこそ国民との良い友人とならざるを得ないであろう」⁴⁵⁾。ここに現れる戴季陶の姿勢から窺えるものは、既にイギリスとの利害関係が薄まっている日本が、民族国際の成立を契機として外交方針を転換させるだろうという、極めて楽観的な期待感であり、それは五・三〇事件当時の姿勢と殆ど変わるところがなかったと言える。戴季陶にとつて、日本は帝国主義国家であるが故に、

積極的に提携すべき対象ではないが、しかし直接に対決すべき敵でもなかったのである。

さて、戴季陶は九月二日に再び民族国際について論じており、その内容は七月のものよりも具体的かつ詳細なものとなっている。ここで彼は、現在の国際政治の潮流における指導的精神は民族主義であるが、それは統一を求める世界主義の方向性と矛盾しないと述べる。即ち、帝国主義の支配から逃れようとする被抑圧民族の運動は、今や自由な発展の地位を勝ち取り、進んで世界統一に向かうものであって、それ故現在の民族主義は実質的には世界主義を求めるものだというのである。そのような考えに立って提示されたのが、「新天下三分策」という構想であった。

戴季陶によれば、今日の世界改造の過渡期における国際組織には二つの種類のものがある。即ち、一つは帝国主義列強による「縦断的国際」＝国際連盟であり、今一つは社会主義政党による「横断的国際」＝コミンテルンである。前者は世界の従来あらゆる特権を維持しようとするものであり、後者は逆にそれを打破しようとするものである。ここで言う「縦断」が支配と抑圧を、「横断」が水平的連携を意味していることは容易に看取できる。然るに、今日の民族主義運動は被抑圧民族が独立と自由を勝ち取るためのものであるため、利害関係と思想関係から見ると、これら既存の二種類の国際組織に立脚することは不可能である。国際連盟が被抑圧民族の解放運動の敵であることは明らかである。他方、横断的性格を持つコミンテルンは、民族主義への一定の理解を持つことは確かであるため、ある程度は評価できると言う。しかし、その水平的な性質故に、被抑圧民族の抵抗という縦断的な運動と完全に一体化できるものではないのである。

こうしたことから、被抑圧民族の抵抗運動は国際的連帯組織を必要としながらも、既存の国際組織の指導下に入ることはできないのである。そこで戴季陶は全く別の国際組織が必要であるとして、次のように述べる。「各国家、各民族は純然たる民族自由連合主義の下で、『民族国際』を組織しなければならない。そして、この『民

族国際」は中国、ソ連、ドイツ、オーストリア、トルコの五カ国の民族を基礎とし、世界のあらゆる弱小民族の国民の政党を包括し、偉大なる国際的勢力を作り上げ、一方では帝国主義の縦断的国際連盟に対抗し、他方では各国社会主義を横断する国際と提携する。「この自由連合を基礎とする新たな縦断的国際組織が成立した後は、全世界の国際組織は三つのものとなる。一つは帝国主義の縦断的国際であり、一つは社会主義の横断的国際であり、今一つは三民主義の新縦断的国際である」⁴⁷。全ての弱小民族はこの新縦断的国際に加わることによって、一方では独立と自由のための新しい力を養い、一方では世界大同にむけての努力の準備と訓練を行なうのである。中国が国際的に生存を図るなら、こうした方向に向かって進む以外に道はないと考えられたのである。

さて、七月三〇日の談話でも述べているように、民族国際は戴季陶が独自に案出したものではなく、それは孫文の構想を受け継いだものであった。⁴⁸孫文は早くも一九一三年の訪日の際に既に民族国際の原型を示しており、それもやはりイギリス主敵論に基づいたものであった。後に「アジア主義」と称される孫文の外交戦略の起源はここにあったと言いうことができる。ここで再び孫文の外交戦略を振り返るなら、それは中国革命の達成に向けての日中提携が主軸となるものであって、革命を妨げているイギリスに対抗する方策として考えられたのが大陸同盟であった。そのため、孫文の考えにおいては被抑圧民族の解放ということは喫緊の課題として表明されたことはなかったのである。

然るに、戴季陶の場合は、中国に国際組織の本部を置こうという点で孫文と同様に自国中心の傾向が窺えるものの、そこには被抑圧民族の解放運動が視野に入っている。この点では、孫文に比べてアジアに対する姿勢はより積極的であると言えるだろう。また、ソ連に本部を置く「横断的国際」とは距離を置こうとしながらも、ソ連という国家を提携の対象としていることは、それをイギリスに対抗する勢力として利用する意図があったものと考えられる。更にここで確認しておくべきことは、七月の談話と同様に、この時の戴季陶の「天下三分策」の構

想の中でも日本の占める地位はなかったということである。孫文の時代とは違って、「日中ソ」三国の提携という発想は殆ど姿を消していたと言ってよいだろう。ここに、孫文の「吾人之亜細亜主義」はその内容を大きく変えて受け継がれたと言うことができる。

それでは、一九二五年の七月から九月にかけて、戴季陶が民族国際の構想を敢えて公然化したのは何故であったのか。それについては、ちょうどこの頃、広州国民政府から沙基事件の事後処理のために北京に派遣された孫科と傅秉常が上海に立寄った際に、彼らから八月一日に北京で「亜細亜民族大聯盟」の準備会が開催されるとの情報を得て、それによって孫文の構想を先取りされることを恐れたためであると言われている。⁵⁰その準備会なるものが実際に行なわれたかどうかは不明であるが、彼の構想は北京政府と列強との交渉を意識したものであった。そのため、民族国際の構想が明らかになると、一部のマスコミにはこれを以って帝国主義に対抗する外交戦略とすべきだとの意見が現れている。⁵¹また、国民政府委員の孫科は、戴季陶が提示した構想を確かに孫文の遺志であることを認め、これがまだ政府の公式の見解にはなっていないが、彼の主張に賛同する人は多いとし、自らもその事業に参画したいと述べていたのである。⁵²このように見れば、戴季陶の民族国際構想の提示は一定の反響を得たと見ることができるであろう。

しかし、結果として民族国際の外交戦略は国民政府の外交政策に反映されることはなかった。そのことは、戴季陶が、一九二五年一月に西山会議出席のために訪れていた北京で、彼を容共分子と見なした暴漢に襲われた後、暫く一切の党務を離れたことに関わるのかもしれない。翌年の国民党二全大会で彼は党務に復帰するが、この後の彼の東方問題への関心は政治面よりも文化・教育面に傾いて行き、民族国際に言及することはなくなる。そして何よりも、一九二七年に国民党の連ソ政策が終焉を迎えたことは、主要構成国の一つを欠くということにおいて、民族国際の実質的な終焉を意味したのである。

おわりに

私は本稿において、戴季陶による孫文「大アジア主義」講演の解釈と外交構想を考察して来た。ここで明らかにされたのは以下の諸点である。

「大アジア主義」講演前後の戴季陶の言説を見ると、そこには孫文思想に対する独自の解釈の端緒が見られたが、こと外交政策に関する限りでは、孫文の基本方針を外れることはなかった。しかし、日本に対する姿勢の面では孫文よりも厳しいものが見られた。中国革命の達成のために、常に日本の援助を求めていた孫文に比べ、戴季陶はより客観的に日本を見ることができたと言うべきであろう。

孫文死後に形成される「戴季陶主義」は、儒教思想を以って孫文の思想を体系的に解釈しようとするものであった。そのため、「大アジア主義」講演もまた同様の基準で解釈されることとなり、講演の趣旨のうちの文化的側面、即ち「思想面」が際立って強調されることとなった。しかし、このような「思想面」の強調は、決して被抑圧民族の抵抗という「事実面」を軽視するものではなかった。即ち、民族国際が実際の運動を指導するものとして構想されたのである。それは、実現に向けて具体的な内容を以って論じられることはなかったが、そこでの反帝国主義の姿勢は鮮明であったと言わなければならない。以上のことから、戴季陶によって継承された孫文のアジア主義は、理論的な観念化と外交戦略的応用という二つの側面を見せるにも拘らず、それは国民革命の遂行に当たっての内政・外交両面での課題に応えようとする点では統一性を持つものであったと言える。

戴季陶は自らの主張を「アジア主義」という名称で表したことはない。しかし、彼の言説は明らかに孫文のアジア主義の一部を受け継いだものであった。それは主として外交戦略の部分においてであったが、孫文と決定的

に違うのは日中提携の発想が殆ど見られなくなっていたことである。孫文が真に日本をアジアの一員と認めていたかどうかという議論は措くとして、少なくとも彼は日本との連携こそが、列強の介入をはねのけつつ中国革命を達成する方途であると確信していた。しかし、戴季陶の言説の中にはそのような発想は全く窺えない。もはや彼の考えの中では、日本が反帝国主義運動の中で占める地位はなかったのである。彼のアジア連帯の姿勢が持続しつつも、その関心の殆どが内陸部に向けられるようになるのは、帝国主義への抵抗に当って連携すべき対象が誰であったかをよく示しているのである。

戴季陶の後、孫文の「大アジア主義」は理論としても戦略としても、しばらくの間は人々の関心を集めることはなくなる。本稿の冒頭で述べたように、それが再び注目を浴びるのは、日中関係の泥沼化の過程においてである。その過程で展開された、汪精衛を始めとする親日政権の大アジア主義言説が、果して当時の歴史的課題に因應得る内容を備えていたか否かについては、稿を改めて考察することにした。

- (1) 当時の日本におけるアジア主義の論調に関しては、拙稿「初期アジア主義の政治史的考察——日本と中国の間——」（『中国研究論叢』第六号、霞山会、二〇〇六年八月）を参照されたい。
- (2) 「孫中山先生在神戸講演」（『民国日報』一九二四年一月二十九日）、陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、法律文化社、一九八九年、一六五～一六六頁。
- (3) 魏琴「国民会議、軍閥和帝国主義」（『嚮導』一九二四年二月三十一日）、同右、一七二～一七三頁。
- (4) 汪精衛「日本に寄す」、『中央公論』一九三九年一〇月、四八〇頁。
- (5) 胡漢民「われ等の大亜細亞主義」、『日本評論』一九三六年五月、一七四頁。
- (6) 戴季陶「東方問題と世界問題」（一九二四年三月一四日）、陳天錫『戴季陶先生文存』第四冊、一九五九年、中央文物供応社、

- 台北、一七三二～一七三五頁。
- (7) 同右、一七三七～一七三八頁。
- (8) 同右、一七四一～一七四四頁。
- (9) 拙稿「孫文のアジア主義と日本——『大アジア主義』講演との関連で——」、「法学研究」（慶應義塾大学）第七九卷第四号、二〇〇六年四月、四九頁。
- (10) 孫文「大アジア主義」（一九二四年一月二八日）、伊地智善繼・山口一郎編『孫文選集』第三卷、社会思想社、一九八九年、三七四頁。
- (11) 孫文「日本は亜細亜に帰れ」（『大阪毎日新聞』一九二四年二月七日）、孫文・講演「大アジア主義」資料集」、一〇六頁。
- (12) 「東亜の一国であることを忘れて了った日本」（『大阪毎日新聞』一九二四年一月二三日）、同右、八四頁。
- (13) 戴季陶「孫文氏と其事業」、『大阪毎日新聞』一九二四年一月二七日。
- (14) 同右『大阪毎日新聞』一九二四年一月二八日。
- (15) 戴季陶「支那を救ふは国家主義」、『大阪毎日新聞』一九二四年二月二八～三〇日。
- (16) 戴季陶「日本の東洋政策に就いて」（『改造』一九二五年三月）、孫文・講演「大アジア主義」資料集」、二二九頁。
- (17) 同右、二二二頁。
- (18) 同右、二二二～二二三頁。
- (19) 同右、二三三頁。
- (20) 同右、二三四頁。
- (21) 白永瑞「戴季陶の国民革命論の構造分析」、『孫文研究』第二号、一九九〇年五月、一一頁。
- (22) 「中国国民党接受総理遺囑宣言」（一九二五年五月二四日）、『戴季陶先生文存』第三冊、九六八～九六九頁。
- (23) そうした評価は現代中国でも同様である。例えば、次のような見方は典型的な評価である。「（『孫文主義の哲學的基礎』と『国民革命と中国国民党』という）二冊の小冊子は、所謂『純正三民主義』の建設の看板の下、三民主義の革命精神を歪曲、去勢、改竄したものであって、人からは『戴季陶主義』と呼ばれるものである」（鄭則民「戴季陶」、朱信泉・嚴如平『民国人物伝』

第四卷、中華書局、北京、一九八四年、一二四頁。

(24) 『孫文主義の哲学的基礎』、民智書局、広州、一九二五年、六頁。

(25) 同右、七頁。

(26) 一部からは、このような体系は「三三一」理論と称されている（鄭佳明「論戴季陶主義的主要特徴」、『求索』一九九三年第一期）。

(27) 『孫文主義の哲学的基礎』、八〇九頁。

(28) ちなみに言えば、ここで戴季陶が用いている「能作」と「所作」という概念は、仏教用語では身口意の三業（心身言葉による行為）を能作とするのに対し、その発動造作を所作とする。篤く仏教を信仰する戴季陶は、恐らくこの概念を応用したものと推測される。

(29) 『孫文主義の哲学的基礎』、四〇頁。

(30) 同右、四一〜四二頁。

(31) 同右、三二頁。

(32) 同右、三三〜三四頁。

(33) 同右、三五頁。

(34) 同右、三六頁。

(35) 同右、三五頁。

(36) 同右、三七〜三八頁。

(37) 「日本の東洋政策に就いて」、二二五頁。

(38) 戴季陶「三民主義的一般意義与時代背景講詞」（一九二五年四、五月間）、中国国民党中央党史編纂委員会編『革命先烈先進詩文選集』第四冊、中華民国各界紀念國父誕辰籌備委員会、台北、一九六五年、四九二頁。

(39) 同右、四九三頁。

(40) 戴季陶「三民主義的國家觀講詞」（一九二五年五、六月）、『革命先烈先進詩文選集』第四冊、四九八〜四九九頁。

- (41) 同右、五〇〇頁。
- (42) 戴季陶『中国独立運動的起点』、民智書局、広州、一九二五年、五頁。
- (43) 同右、六頁。
- (44) 『戴季陶對於時局之談話』、『上海民国日報』一九二五年七月三十一日。
- (45) 同右。
- (46) 『戴季陶君關於民族國際的談話』、『上海民国日報』一九二五年九月二日。
- (47) 同右。
- (48) 同様のことが蒋介石に宛てた書簡にも記されている（戴季陶「致蒋介石書」、一九二五年二月二三日、『戴季陶先生文存』第三冊、九八二〜九八三頁）。
- (49) 戴季陶『日本論』、一九二八年、市川宏訳、社会思想社、一九七二年、九八頁。
- (50) 徐鯨潤「戴伝賢対『民族國際』的推行与貢獻」、『中華民國史專題論文集』、国史館、台北、一九九二年、二六一頁。
- (51) 梁紹文「介紹『國際民族』的運動併謁北上代表团」、『廣州民国日報』一九二五年九月一五日。
- (52) 「孫哲生關於民族國際之談話」、『廣州民国日報』一九二五年九月一五日。